

2019 年度支部横断企画

「周縁か中心か？——音楽史の中のベルギー」

第 1 回シンポジウム「1870 年以降：ベルギーとヴァグネリズム」

報告記 大迫知佳子

2019 年 7 月 20 日（土）、同志社女子大学今出川キャンパスにて、2019 年度日本音楽学会支部横断企画「周縁か中心か？——音楽史の中のベルギー」第 1 回シンポジウム「1870 年以降：ベルギーとヴァグネリズム」を行った。このシンポジウムは、日本音楽学会西日本支部の椎名亮輔（研究報告）と大迫知佳子（研究報告）、東日本支部の友利修（司会）と安川智子（研究報告）に加え、非会員/神戸大学の岩本和子（基調講演）により、企画・運営された。

シンポジウムの内容の報告に入る前に、まずは、本企画の趣旨、目的、そして背景について簡単に説明しておきたい。本企画は、「周縁か中心か？——音楽史の中のベルギー」という共通タイトルに基づく 2 回（西日本・東日本）のシンポジウムを開催する、というものである。各シンポジウムの副題は、「1870 年以降：ベルギーとヴァグネリズム」（第 1 回シンポジウム：京都）、「1830 年～1870 年：ロマン主義とフェティス」（第 2 回シンポジウム：東京：演奏会付き）とした。つまり、7 月のシンポジウムは、本企画の前半を担う部分であった。副題設定のねらいは、西日本でのシンポジウムで提起された問題をさらに大きなパースペクティブに入れるため、東日本でのシンポジウムへと遡っていく考察形式をとることにある。これら東西 2 つのシンポジウムを通して、近代ヨーロッパ音楽史の言説成立にベルギーがどのような役割を果たし得たのかを、フランス・ドイツとの関係を軸に、文学との比較も交えた学際的な視点から考察することが、本企画の目的である。

現ベルギーは、フランス語文化圏・オランダ語文化圏・ドイツ語文化圏という 3 つの言語文化圏を持ち、フランス・オランダ・ドイツに囲まれた国である。その地理的・歴史的・言語文化的状況から、ベルギーの音楽文化は、ヨーロッパ（西欧）の音楽文化、特に、フランス・ドイツの音楽文化の密接な「周縁」として存在し、また、ヨーロッパ音楽史の発展において、「中心」ともなり得る重要な役割を担ってきた。しかし、ベルギーが 1830 年にできた比較的若い国であることや、ヨーロッパ北方の小国であることなどから、これまで、日本の音楽学界において、ベルギーの音楽史に焦点が当てられたことはほとんどなかったといってよい。実際、2018 年 11 月 4 日に行われた日本音楽学会全国大会セッション N（友利司会）では、近代ベルギーに関する発表が、フランス・ドイツ音楽の諸研究者を巻き込んだ議論へと発展した。この議論によって明らかになった課題を改めて取り上げる必要がある、という問題意識が、本企画立ち上げの動機である。

それでは、シンポジウムの内容の報告に移りたい。今回のシンポジウムには、それぞれの講演・報告だけでなく、フロアを巻き込んでのディスカッションを重要な要素のひとつとして据えた。したがって、上述セッション N で活発な議論を引き出し、セッションをつなぐストーリーを描き出した司会者（友利）に司会を是非にとお願いし、ご快諾をいただいた。

司会者によるプログラムの確認、椎名による趣旨説明、大迫によるベルギーに関する説

明（特に仏語圏と蘭語圏の間の言語問題を中心としたベルギーの概史）に続く、岩本の基調講演「マーテルランク『ペレアスとメリザンド』のゲルマン性」で、シンポジウムは幕を開けた。岩本は、長年フランス文学・ベルギー文学の研究に従事されており、「文学との比較も交えた学際的な視点からの考察を行う」という本企画の目的のひとつが達成される形となった。この基調講演では、ベルギーのフランデレン地域に生まれたモーリス・マーテルランクの戯曲「ペレアスとメリザンド」と、その戯曲をほぼそのまま用いたドビュッシーのオペラ《ペレアスとメリザンド》に焦点を当て、特にマーテルランクの戯曲原文にあったシーンで、ドビュッシーのオペラでは削除されている「女中」の登場シーンの意味合いが考察された。すなわちこの「女中」の登場シーンは、マーテルランクの戯曲で描かれた「夜明けから日没まで」の時間軸とは別の時間軸で語られる部分であり、この女中たちは水の精の象徴であること（この水の精がはっきりと描かれているベルギー王立図書館所蔵の「ペレアスとメリザンド」における美しい挿絵も示された）、さらにこの水の精にはフーケを媒体としたゲルマンの「ウンディーネ伝説」との関連性が示唆されること、つまりドビュッシーが削除した部分には、フランデレン地域出身のマーテルランクのゲルマン的な精神風土が表れていたことが明らかにされた。そしてこのゲルマン性とヴァーグナー作品との繋がりにも併せて言及があった。安川の研究報告「ヴァグネリズムとドビュッシズム」は、2つの「イズム」とその周辺の「イズム」に焦点を当て、ヴァグネリズムからドビュッシズムへの流れを人々の知の流れとして読み解くものであり、知の流れを担う人的ネットワークと、それらへのベルギー人のかかわりが論じられた。この時、ヴァグネリズムとドビュッシズムを対概念とする単純な図式を超えて、フランス音楽におけるヴァグネリズムは、同時期のフランスにおけるグランド・オペラとオペラ・コミックの関係や、それに伴うオペラ劇場の問題という文脈で読み解けること、また、フランスにおけるドビュッシズムの発展には、和声家や批評家のレベルで、ベルギー（あるいはベルギー人）との連携がかかわっていることが示された。大迫の研究報告「ベルギー北方の音楽家の言説に見るヴァグネリズム」は、ベルギー北方、つまりフランデレン地域出身者の著述に見られるヴァグネリズムについて明らかにするものであった。まず、ベルギーにおける初期のヴァーグナー受容には「南の国々やパリ」に対する意識が見られたこと、1870年代以降のブリュッセル・モネ劇場でのヴァーグナー歌劇仏語版上演はフランスに先駆けたものが多かったことを背景として指摘した。そして、そのような背景にあって、フランソワ＝オーギュスト・ヘファールト（ベルギー北方ヘント出身）がヴァーグナーの作品（音楽理論）および言説（音楽思想）のそれぞれに肯定的な姿勢を見せていたこと、そこにはヨーロッパ芸術の歩みにおける「フランス」と「ドイツ」を仲介する視点が表れていることが示唆された。椎名の研究報告「ダンディ派とベルギー」は、ベルギー出身の作曲家セザール・フランクに師事したフランス人作曲家ヴァンサン・ダンディが、ヴァグネリアンであったベルギー人弁護士オクターヴ・モースと出会うことによって可能となった音楽史に焦点を当てるものであった。具体的には、ベルギーのモネ劇場における2人の出会い以降、ダンディが、モース創立の前衛的な芸術集団「二十人会」（のちに「自由美学」へと発展的解消を遂げた）へ協力を惜しまなかったこと、これにより数多くのフランス人作曲家の作品がベルギーへ紹介されたこと、そして、ダンディ自身の作品を含むフランスのオペラが、彼の尽力によりモネ劇場で初演されたことなどが紐解かれ、今まで光の当てられなかったダ

ンディ（およびその周辺の人脈）とベルギーの関係が明らかにされた。

シンポジウムへの参加者は30名ほどであったが、東京や広島など遠方からの参加や、様々な分野の研究者（例えば、中世ヨーロッパ文学研究者等）の参加が見られたほか、当日までに、「音楽の専門家ではない一般のものであるが、興味があるので参加したい。そのようなことは可能か。」という旨の問い合わせが複数あったことから、広く社会に向けたシンポジウムを開催することができたのではないかと考えられる。

第2回シンポジウムに向けての第1回シンポジウムの課題として企画・運営者から挙げられた点は、大きく分けて次の2点であった。ひとつ目は、3時間（ディスカッションを入れると4時間弱）にわたるシンポジウムの中で、様々な内容の講演・報告が行われた結果、情報量の過多に陥ったという点である。確かに、「ヴァグネリスム」という共通テーマを持ちながら学際性を目指した本シンポジウムにおいては、それぞれの講演・報告の視点が全く異なり、言及された作家名、音楽家名、雑誌名も多く、興味深いながら話題についていくことで精いっぱいという感を与えたことは否めない。このことは、2つ目の課題、つまり、ベルギー芸術の専門家とフランス芸術の専門家による講演・報告の関連性を、参加者にわかりやすく、かつ明確に示せなかったという点にも通ずる。これは、シンポジウムの企画段階で、それぞれの講演・報告の繋がりを考えて大まかな内容をすり合わせながら、その詳細については事前打ち合わせをしないまま（これには、事前打ち合わせによる予定調和を避けるという別の理由もあった）様々な話題が提供された結果であり、ベルギーにおけるベルギーの音楽（史）の位置づけ、およびフランスにおけるベルギーの音楽（史）の位置づけや、それらの繋がりに、ややあいまいさが残ってしまった。第2回シンポジウムは、12月14日（土）に、国立音楽大学にて、国立音楽大学学生らによる演奏会付きで行うが、これらの反省を踏まえ、課題解決に努めたい。この詳細については、開催後改めて報告をする。

最後になりましたが、この企画を採択し、ご助力くださった日本音楽学会審査委員会の先生方、共催を実現させてくださった日本ベルギー学会会長北原和夫先生、ベルギー研究会会長岩本和子先生、後援と温かい励ましをくださったベルギー大使館ギュンテル・スレーワーゲン元大使、伊達泰子さま、2回のシンポジウムの素敵なチラシをデザインしてくださった京都工芸繊維大学の岩本馨先生、企画を支持し応援してくださったブリュッセル自由大学 LaM の友人たちに心から深謝申し上げます。また、企画申請書の作成段階からご尽力くださり、丁寧なご指導を下された椎名先生、友利先生、岩本先生、朝山奈津子さん、上山典子さん、そして、企画申請書作成から運営、さらに研究報告に至るまで多大なご協力、貴重なご助言をいただいた安川さんに深く深くお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。